

新生児期・乳児期用文章完成法検査 (SCTNK S・ I K S) による母子関係(1)

—その概要と統計的分析から—

恒 次 欽 也 ・ 庄 司 順 一 ・ 川 井 尚

Kinya TSUNETSUGU Junichi SYOUJI Hisashi KAWAI

(特殊教育教室)

(都立母子保健院) (東京都精神医学総合研究所)

1. はじめに

こんにち産褥期の精神障害 (いわゆる Maternity Blues¹⁴⁾) についての関心が高くなり、調査的事例的検討がさまざまに試みられてきている。たとえば、岡野禎治ら (1986) は、1968年から1981年までの14年間に三重大精神科受診の産後精神病の臨床統計的研究を報告している。それによると、発病時期は産後1週間前後に発病する早発群と、産後1~2カ月に発病する遅発群とがみられ病後も異なっているという⁴⁾。また、他方ではこうした視点とは別個に母子関係の発達の起点を妊娠期・胎児期においてその様相を捉えようとした研究も数多く認められるようになってきている⁵⁾。

われわれは、従来からこうした視点にもとづいて妊娠期の母子関係を把握するためにSCT-PKS (妊婦用文章完成法検査) を作成して実施し、いくつかの知見を報告してきた^{2) 3) 6) 11)}。さらに、その延長線上に新生児期用文章完成法検査 (SCT-NKS)、乳児期用文章完成法検査 (SCT-IKS) をあいついで作成し、資料の収集をしてきた。今回は、このSCT-NKS (以降NKSと略す) を出産退院時に実施した母親達が産後9か月たった時点でSCK-IKS (以下IKS) を実施しえたものを対象としてこの間の縦断的な検討を加えた結果を報告する。

Gard, P.R. ら (1986) は出産後に blues になったものとならなかったものを生化学的、心理社会的、医学的変数を説明変数とした判別分析¹⁴⁾を行った。それによると出産回数が判別に寄与するところが大きくであると報告している。

われわれの場合は彼らの研究とは異なり心理社会的な変数のみを用いて、以下のような目的に従った検討を加えた。

イ. 対象者のこれまでの出産経験の有無 (初産婦か経産婦かでグループを2つにわけ) がSCTの母子関係に関わる質問項目 (領域1) への回答に影響を与えてこれらのグループの間を判別できるかどうか、判別できたとしたならばどのような回答¹³⁾により判別されるのかを林知己夫による数量化第Ⅱ類を適用して分析すると共に、

ロ. 出産直後 (NKSでおおよそ平均新生児日齢7日) と、出産から暫く経ってから (IKSでは出生児が生後9か月になったころ) それぞれの時期に概当の検査を実施して、回答の縦断的な変化などを検討する。

2. 方 法

① 研究の対象者

まず、新生児期用文章完成法検査NKSの対象となったのは、都立母子保健院産科で出産した母親達で退院1日前に回答するように求めた。その総数は健康新生児の母親521名である。この時点での新生児の平均日齢は約7日であった。このNKSを実施してから乳児が生後およそ9カ月を迎えた母親の中から乳児期用文章完成法検査ISKを実施しえたもの143名を今回の分析の対象者とした（実際は166名であるがフェイスシートで不明なものなどを除いて143名となった）。内訳は、母親の年齢20～24歳15名（10.5%）、25～29歳71名（49.7%）、30～34歳47名（32.9%）、35歳以上10名（7%）であった。また、外的基準に設定した出産経験は初産群が63名（44.1%）、経産群が65名（45.5%）、不明が15名（10.4%）であった。

なお、対象となった母親の乳児達は出生時平均体重3289.1g（SD 351.1g）、男児80名48.2%、女児83名50.0%、不明3名1.8%である。

② 検査内容と実施方法

回答者は通常の精研式SCTと同様に途中まで記述してある文章の後を続けて記入し、最後にフェイス・シートに関わる質問に回答するように求められた。NKSの質問項目は、Table 1に、ISKの質問項目はTable 2に示した。また、今回は上述したように母親の出産経験が新生児期と乳児期とで回答にどのような影響を与えるのかを目的にしているので、分析の対象とした質問項目は予め各検査毎にいくつかの領域に項目を分類したうちから領域1の「母子関係」を選択し、その中の両検査に共通性のある項目だけにとどめた。その項目間の対応関係は次のとおり（左側がNKS、右側がISK）である。

I 3 N	赤ちゃんが泣くと	←……………→	I 13 I	子どもが泣きやまないと
I 9 N	おっぱいをあげたとき私は	←……→	I 16 I	おっぱいをあげたとき私は
I 2 N	出産	←……………→	I 4 I	出産
I 12 N	赤ちゃんといると私は	←……………→	I 2 I	子どもといると私は

註：頭のIはITEMのIで数値は項目番号、最後のNまたはIはNKSまたはISKの省略である。

Table 1 SCT—NKS質問項目

1.	はじめて赤ちゃんと会ったとき私は
2.	出産
3.	赤ちゃんが泣くと
4.	はじめて赤ちゃんと会ったとき夫は
5.	乳房
6.	はじめて赤ちゃんを抱いたとき私は
7.	赤ちゃんが生まれて、夫のかわったことは
8.	心配なことは
9.	おっぱいをあげたとき私は
10.	私が泣きたくするのは
11.	赤ちゃんが生まれて、私のかわったことは
12.	赤ちゃんといると私は

③ 資料の整理方法

得られた資料は最初に各質問項目ごとに比較的頻度の多い回答を抽出して原文の意図に沿った形でまとめなおしてそれを再度コーディングしなおす為の回答のコーディングカテゴリとした。その次にこのカテゴリにもとづいて回答者の各反応をコーディングしなおした。このコーディングした資料を分析の対象とした。

Table 2 SCT-IKSの質問項目

1. 私は、子どもの頃	2. 子どもがいると、私は
3. 子どもの表情	4. 出産
5. 夫と子どもは	6. 子どもは、こわいとき
7. 妊娠に気づいたとき、私は	8. 私は子どもと
9. 私は女として	10. 子どもが生まれて、夫のかわったことは
11. 困りはてたとき、私は	12. おなかの赤ちゃんが動くのを感じたとき
13. 子どもが泣きやまない	14. 私は母と
15. 心配なことは	16. おっぱいをあげたとき私は
17. 夫と私は	18. 子どもが生まれて、私のかわったことは
19. 性	20. 妊娠に気づいたとき、夫は
21. 私が泣きたくなるのは	22. 私は母親として
23. 私は家にいると	

なお、カテゴリのうちの Rej. (回答拒否) とはある項目に対して未回答であった際に、Fail (回答失敗) とはある項目から最後の項目まで未回答であったときにそれぞれの項目に対してコーディングした。また特異反応とは心理臨床の上で注目されるような回答に、その他とはコーディング・カテゴリとしてはまとめにくい少数の回答に、さらに、O-Nは negative なその他に、O-Pは positive なその他にそれぞれコーディングした。

3. 結果と考察

① NKSとIKSのクロス集計

NKSとIKSの両検査の共通項目間でクロス集計をして、 χ^2 検定を行なったところ I12NとI2I、12Nと14Iとの間でそれぞれ $\chi^2 = 189.43$ ($P < 2.75\%$)、 $\chi^2 = 196.88$ ($P < 4.56\%$) で有意であった。そこで、これをもっと単純化して回答カテゴリを pos. (positive), neg. (negative), neu± (neutral or ambivalent) の3種に分類しなおして頻度、出現比を算出したものを Table 3 に示した。

これによると、NKSの段階で pos. が IKS では neg. に変わったものが NKS の pos. の内の3分の1に達している。この中味を見てみると IKS での neg. は「いらいらする」、「忙しい」が4分の3を占めている。

更に、全体としてみても NKS よりも IKS で neg. が増加して、pos. が減少する傾向がある。これは NKS の場合では出産直後に、赤ちゃんと一緒にいる気持ちを尋ねているので、当然一緒にいるだけで pos. は評価が多くなると推定される。他方、IKS では生後9カ月前後に達している為に、この間の育児行動、養育行動での疲労や苦勞などが反映して若干 neg. 評価が増加したと考えられる。

つぎに、I2Nと14Iの組合せ(共に「出産」)で同様にクロス集計しなおした結果を Table 4 に示す。これによると全体では NKS の neg. が IKS で約11ポイント少なくなり、逆に NKS の pos. は IKS で約11ポイント増加し、neu± は殆ど変化がない。これは出産に対して新生児期よりも乳児期では positive な評価を下すものが増えていることを示している。出産前後の不安や苦勞が育児を通しての母子間の交流経験などによって美化される傾向を示したものと見えよう。

Table 3 NKSとIKSのクロス集計（縦：I 2 I，横：I 12N）

NKS IKS	Neg.	Pos.	Neu.±	IKS全体
Neg.	5	40	4	49
	10.2	81.6	2.8	100.0
	35.2	33.3	44.4	
	3.5	28.0	2.8	34.3
Pos.	8	75	4	87
	9.2	86.2	4.6	100.0
	57.1	62.5	44.4	
	5.6	52.4	2.8	60.8
Neu. ±	1	5	1	7
	14.3	71.4	14.3	100.0
	7.1	4.2	11.2	
	0.7	3.5	0.7	4.9
NKS全体	14	120	9	143
	100.0	100.0	100.0	
	9.8	83.9	6.3	100.0

註：各セルの上段は頻度，2段目は横の出現比，3段目は縦の出現比，下段は全体の出現比

Table 4 NKSとIKSのクロス集計（縦：I 2 I，横：I 12N）

NKS IKS	Neg.	Pos.	Neu.±	IKS全体
Neg.	21	8	12	41
	51.3	19.6	29.3	100.0
	36.9	16.0	33.3	
	14.7	5.6	8.4	28.7
Pos.	22	30	15	67
	32.9	44.8	22.4	100.0
	38.6	60.0	41.7	
	15.4	21.0	10.5	46.9
Neu. ±	14	12	9	35
	40.0	34.3	25.8	100.0
	24.6	24.0	25.0	
	9.8	8.4	6.3	24.5
NKS全体	57	50	36	143
	100.0	100.0	100.0	
	39.9	35.0	25.2	100.0

註：各セルの上段は頻度，2段目は横の出現比，3段目は縦の出現比，下段は全体の出現比

② 数量化第Ⅱ類による分析

出産経験を外的基準とし、両検査共通の4つづつの質問項目を説明変数とした分析の結果を以下に見ていきたい。

NKSの相関比は0.531で分析の精度は高いと言える。IKSの方は0.365で分析するのに十分な精度が得られた。

つぎに外的基準のグループごとにノーマライズド・スコアによるサンプル・スコアの累積度数分布曲線を描きその交点からグループ間の判別率を求めた。NKSでは約80%で初産群と経産群とが判別され、INSでは約76%で同様に判別された。

そこでどういう項目がこのグループ間を判別するのに寄与しているのかをみるために両検査の各項目のカテゴリ・レンジ及び偏相関を算出してそれをTable5に示した。

これによれば、NKSの場合ではカテゴリ・レンジの大きい順に並べるとI3N, I2N, I12N, 19Nとなる。偏相関の大きい順ではI2N, I12N, I9N, I3Nとなった。このことから判別に寄与の高い項目はI2N, I12Nであるといえる。ただし、同Tableをみれば分かるように偏相関はいずれも高い数値を示しているのでこれらの寄与の程度は相対的なものである。

IKSではI13Iがカテゴリ・レンジが最大でつづいてI16I, I2I, I4Iの順に小さくなっている。偏相関ではI16Iが0.454と最も大きく、I2I, I4I, I13Iという順になっている。この結果から判別に最も寄与している項目はI16I, I2Iの2つであれと推測される。

つぎに、NKSとIKSそれぞれの出産経験のグループごとのサンプル・スコアの平均と標準偏差を求めた結果をTable6に示す。NKSでは初産群が負の値（平均-0.740）を、経産群が正の値（0.718）を得ていることと標準偏差の大きさを勘案するとカテゴリ・スコアが負の値のカテゴリは初産群に、正の値のときは経産群に特徴的なカテゴリであるということができる。

IKSでは初産群が正の値（平均0.619）、経産群（-0.590）が負の値になっている。

Table 5 NKSとIKSのカテゴリ・レンジと偏相関

NKSの項目	レンジ	偏相関	IKSの項目	レンジ	偏相関
I2 出産	2.967	0.549	I4 出産	1.684	0.339
I3 赤ちゃんが泣くと	3.916	0.500	I13 子どもが泣きやまない	4.124	0.328
I9 おっぱいをあげたとき 私は	2.237	0.519	I16 おっぱいをあげたとき 私は	3.634	0.454
I12 赤ちゃんといると私は	2.757	0.542	I2 子どもといると私は	3.125	0.362

Table 6 IKSとNKSの各群ごとの人数とサンプル・スコアの平均とSD

	人数	IKS	NKS
初産群	63	0.619 (0.726)	-0.740 (0.689)
経産群	65	-0.590 (0.858)	0.718 (0.680)

註：（ ）内SD

これは正の値を持つ回答カテゴリは初産群に、負の値を持つそれは経産群に関わるカテゴリであることを意味する。

そこでNKSとIKSとで対応した項目同士を左右に並べて回答カテゴリのカテゴリ・スコアを表示したものを Table 7-1 から 7-4 に示してこの各 Table から各グループの特徴を明らかにしたい。

a. I 12N「赤ちゃんといると私は」、I 2 I「子どもといると私は」(Table 7-1 参照)

NKSでは初産群は楽しい、母親の実感、母親の自覚であって母親となったことの喜びと同時に責任・自覚を感じている。それに対して経産群はこのグループの平均値付近に適

Table 7-1 NKSとIKS対応する項目のカテゴリ・スコア(スコアを負の値からソート)

IKSの項目とカテゴリ・スコア		NKSの項目とカテゴリ・スコア	
子どもといると私は ITEM 2- IKS		赤ちゃんといると私は ITEM12- NKS	
1 RE J.	- 1.423	15 O-P	- 0.863
12 童心にかえる	- 1.188	7 楽しい, 嬉しい	- 0.759
13 O-P	- 0.730	8 母親になった実感, 満足感	- 0.722
14 O-N	- 0.442	9 母親としての自覚, 責任	- 0.547
11 かわいい	- 0.073	11 退屈しない, あきない	- 0.471
9 一日が充実, あっという間	- 0.063	4 その他	- 0.307
5 楽しい, 幸せ	- 0.062	6 おだやか, なごやか	- 0.060
10 忙しい	0.002	12 赤ちゃんが気になる	0.154
8 いらいら, わずらわしいが楽しい	0.140	13 楽しいが大変	0.307
6 安心, 落ち着く, ほっと	0.231	16 O-N	0.310
7 母親としての自覚	0.660	5 幸せ	0.313
4 その他	1.702	1 RE J.	1.314
		14 忙しい	1.496
		3 特異	1.869
		10 かわいい	1.893

Table 7-2

IKSの項目とカテゴリ・スコア		NKSの項目とカテゴリ・スコア	
おっぱいをあげたとき私は ITEM16- IKS		おっぱいをあげたとき私は ITEM 9- NKS	
8 母乳が(沢山)出るといい	- 1.294	19 O-N	- 1.313
4 その他	- 1.251	8 かわいい, いとしい	- 1.307
7 子どもがかわいい	- 1.128	12 赤ちゃんの力, 生命力	- 0.649
9 沢山飲んで, 上手に飲んで	- 1.000	18 O-P	- 0.435
13 O-N	- 0.621	13 不思議, 何ともいえない気持ち	- 0.271
11 飲む能力, 生命力を感じる	0.092	5 母親になった実感	- 0.230
12 O-P	0.197	7 母親としての自覚, 責任	- 0.190
5 母親になった実感, 責任	0.247	1 RE J.	- 0.122
10 きずな, むすびつきを感じる	0.248	15 母乳が出るか, 足りなくないか	- 0.079
6 嬉しい, 幸せ, 安心	0.468	16 痛い	0.118
1 RE J.	2.340	6 感動, 感激	0.285
		9 嬉しい, 喜び, 満足	0.404
		4 その他	0.477
		11 沢山, しっかり吸って, 丈夫に	0.626
		17 赤ちゃんに済まない, 気の毒	0.799
		10 うまく飲むので嬉しい, 安心する	0.924

Table 7-3

I K S の項目とカテゴリ・スコア		N K S の項目とカテゴリ・スコア	
出産 ITEM 4-I K S		出産 ITEM 2-N K S	
7 大仕事	- 0.662	8 辛い, 苦しい	- 0.921
5 大変だが感激, 楽しい	- 0.438	17 O-P	- 0.623
9 大変	- 0.422	14 最後, 2度といやだ	- 0.315
13 O-P	- 0.209	10 その時は辛いが, 幸せ	- 0.280
11 恐さ, 恐怖	- 0.168	5 大変なこと	- 0.266
8 (思ってたより)楽だった, 安心	- 0.005	13 感激, 感動	0.048
14 O-N	0.198	6 女性としての大仕事	0.169
12 女だけの特権, 貴重	0.226	7 楽だった	0.249
4 その他	0.280	11 嬉しい, 喜び	0.617
6 楽しい	0.951	9 痛い	0.756
10 不安だったが忘れた, 不思議	1.023	4 その他	0.951
		1 R E J.	1.201
		18 O-N	1.310
		16 心配, 不安	1.716
		12 生んで良かった	1.727
		15 安心した, 満足した	2.047

Table 7-4

I K S の項目とカテゴリ・スコア		N K S の項目とカテゴリ・スコア	
子どもが泣きやまない ITEM 13-I K S		赤ちゃんが泣くと ITEM 3-N K S	
3 特異	- 1.591	11 眼が覚める	- 1.486
10 いらいらするが, ~する	- 0.915	3 特異	- 0.960
13 O-N	- 0.859	19 O-N	- 0.577
4 その他	- 0.430	7 自分も泣きたくなる	- 0.361
9 あせる, 困る	- 0.150	8 心配, 不安, 気になる	- 0.347
5 理由を考える	- 0.020	18 O-P	- 0.269
8 抱く, 抱いてあやす	- 0.020	9 とまどう, オロオロする	- 0.256
6 いらいらする, いらだつ	0.142	17 私を呼び, 求め, 頼りにしてる	- 0.165
11 おっぱいをあげる, あやす	0.462	14 初めは……だが, 慣れてきた	- 0.016
7 辛くなる, 泣きたくなる	0.499	5 理由を考える (おむつ, 空腹)	0.027
12 O-P	2.532	6 抱きたくなる, 抱いてしまう	0.168
		12 かわいい, いとしい	0.337
		4 その他	0.619
		13 かわいいけどたいへん, 不安	0.834
		10 おっぱいが張る, 痛くなる	0.866
		1 R E J.	1.452
		16 泣くと元気が, 安心する	2.430

当な回答カテゴリがないけれども楽しいが大変, O-N, 幸せ, R E J., 忙しいなどであって初産群と比較して母親意識や素朴な喜びなどはあまり認められず, 複雑な思いで新生児を迎えている様子が伺える。

I K S では初産群が母としての自覚, 安心で子どもとの一体感が母性意識を喚起すると同時に精神的安定をもたらすようである。これに対して経産群では童心にかえる, O-P, O-N であって N K S の場合と同じように単一の感情ではなく複雑な心境を偲わせるもの

となっている。

NKSからIKSへの変化として捉えてみると、一貫して初産群は乳児と一緒にいることで喜びや母親意識、精神的な安定感が認められるのに対して、経産群ではおそらくは個人々人によって第2子以降の迎え方がさまざまである事情を反映してか一貫した態度は認められないところにそれぞれの特徴が現れているといえよう。

b. I9N「おっぱいをあげたとき私は」、I16I「おっぱいをあげたとき私は」(Table 7-2 参照)

NKSでの初産群は、新生児の哺乳行動を力強い生命力ととらえ、それに対する率直な驚きが出している。経産群では乳児の哺乳がうまくいってほしいという期待感ないしはあまり母乳が出ない場合には罪愆感が強くなるようである。初産群は乳児への初めての授乳体験が生命力の神秘性を感じさせるのに対して、経産群にはそうしたことよりも授乳することへの現実的な問題に関心が強いと言える。

IKSの段階では初産群は嬉しい、幸せ、経産群はO-N、子どもがかわいい、たくさん飲んでといったものである。乳児もおよそ生後9カ月で離乳は既に始まっており、離乳食への関心のほうがおそらく高くなっていると推測され、哺乳もまた人工乳によるものと思われるので両グループ共に差し迫った現実的な反応は少なく授乳体験によってひきおこされたさまざまな感情や意識が現れたものようである。このことから、NKSからIKSへの変化は初産群では授乳体験への新鮮な驚きからこうした体験を重ねてきたことからくる喜びの感情が現出したということになる。経産群では新生児期の現実的な不安がその時期を無事に経過することで新生児期とは異なった感想となって現れたものと了解できる。

c. I2N「出産」、I4I「出産」(Table 7-3)

NKSを実施したころ、初産群は辛い、苦しい、最後にしたい、と一様に出産経験の大変さ、苦勞が率直に表明されている。これに対して経産群では嬉しい、痛い、その他、REJ. といったところであって初産群とは異なって嬉しいといった反応も認められる。

IKSでは初産群は、出産での苦勞を楽しい、不安だったが忘れたなどであってそれほど出産経験を不快なものとは捉えていないようである。経産群の場合では出産の大変さが必ずしも negative とはいえない程度に認めている様子が伺える。

初産か経産かによってNKSからIKSへの変化の仕方がほかの項目に比べて際だって異なっているように思う。つまり初産群では出産直後のNKSでは辛さが前面にたっているのに対してIKSの実施期にはその体験をたとえ辛かったとしても良いものであった、良い思い出であったと捉えようとする傾向に顕著に現れている。経産群では初産群とは異なり、やはり出産は大変だという思いが強いようである。

d. I3N「赤ちゃんが泣くと」、I13I「子どもが泣きやまないと」(Table 7-4)

NKSでは初産群は特異、O-N、自分も泣きたくなる、心配で出産直後の乳児の泣きにどのように対応したらよいのか分からずに困惑する姿が現れている。経産群ではその他、かわいいけど大変、おっぱいが張るなどであり新生児の泣きに困惑するという感じではなく、ゆとりのある態度が感じられる。

IKSの初産群はおっぱいをあげる、あやす、辛くなるであり新生児期からこれまでの経験に伴ってそれなりの対処をするがやはり辛いといった様子が認められる。これ

に対して経産群ではいらいらするが～する、O-N、その他であって、これは経産群の場合では乳児だけでなく上の子どもがいるのでそういった子どもの泣きへの対処も含まれていると思われ、その分態度が一様ではなくなっているようである。

NKSからIKSへの変化では初産群は新生児期ではおろおろしているだけであったのが乳児期にはそれに対応することができるようになってきている様子が分かる。経産群では泣きそのものに新生児期から困ってはいるもののそれなりにゆとりをもって対応していることがみてとれるであろう。

これまでに述べてきた結果から初産群は初めて経験することからくる新鮮な感動、驚き、喜びが多く認められる一方で乳児の泣きのような側面では困惑する姿が浮かび上がってきた。また、子どもが新生児期から乳児期へと移行していくとともに母親として成長していく過程も伺われた。

経産群の母親達は、初産群の母親達のような一様な反応は認め難く新生児期においても、乳児期においても複雑な感情にあるようである。こうした両グループの相違は他の要因とも複雑に絡み合っささまざまな母子関係を形成していくものと考えられる。

池本桂子ら（1986）らはマタニティ・ブルーの頻度、臨床像をZung自己評定式抑うつ尺度を含む質問表を作成し、1047名の産婦を対象に産後3～4日目に調査を実施している。この報告によれば、初産群は経産群と比較して、症状項目別にみた場合には憂慮、不安、てい泣、食欲減退、精神運動焦燥、決断困難、悲哀感、体重減少、精神運動制止の項目が有意に高く、経産群では頭痛、希死念慮が高いという。総じて、初産群でややマタニティブルーが強い傾向にあるという。われわれのデータではこうした問題への分析をおこなっていないので直接的な比較は妥当ではないが、初産群は感情的な反応に強くとられる傾向があるのに対して、経産群は直面する課題、問題に対しての現実的な反応が強いという一般的な傾向があるようである。これが何らかの形でつまづいた際に初産であるか、経産であるかによってそれぞれ異なった独自の臨床像を示す基になっており、仮説的には池本らが記述したような臨床像となって現れると考えられる。しかし、これも新生児期を無事に通過することができたならば母親達は乳児期をゆとりのある態度で子どもと接して行けるようになると推測される。

今後の課題としては、

今回は両検査に共通の項目同士での分析を中心にまとめてきたのであるが、これを全ての領域、項目に互って検討する必要がある。また、従来より報告を重ねてきたSCT-PKSを用いた妊娠期から新生児期、乳幼児期に至る資料の収集をすすめてきているので、縦断的な変化を追跡検討していきたい。

（昭和61年9月16日受理）

附 記

1. 検査にご協力下さった妊娠の皆様、並びに検査実施に多大なご協力を下さった都立母子保健院の関係各位に謝意を表したいと思います。
2. 本研究は厚生省の心身障害児研究「母子相互作用」研究班（班長：小林 登）の研究費によるものである。
3. 本研究の資料の収集ならびに分析にご協力下さった東京大学母子保健学教室の小林臻先生、飯島久美子氏に謝意を表します。

4. 本研究の計算は名古屋大学大型計算機センターで行った (FACOM ANALYST)。

参考文献

- 1) 池本桂子ほか 1986 いわゆるマタニティブルーの調査—その1.出現頻度と臨床像—精神医学 28(9) pp. 1011—1018
- 2) 川井 尚ほか 1982 妊娠期の母子関係～妊娠用文章完成法検査 (SCT-PKS) の作成～乳児発達研究会発表論文集 第4号 pp. 47—50
- 3) 庄司順一ほか 1983 妊娠初期の母子関係(2)～妊娠用文章完成法検査 (SCT-PKS) の改訂と男性版の作成～乳児発達研究会発表論文集 第5号 pp. 44—47
- 4) 岡野禎治ほか 1986 産後精神病の臨床統計的研究 精神医学 28 pp. 505—512
- 5) 周産期医学編集委員会編 1983 母子相互作用 周産期医学 臨時増刊号 13巻12号
- 6) 恒次欽也ほか 1984 妊娠期の母子関係(3)～妊娠用文章完成法検査の数量化第Ⅱ類・Ⅲ類による統計的分析～乳児発達研究会発表論文集 第6号 pp. 18—26
- 7) 恒次欽也ほか 1985 妊娠期の母子関係(5)～SCT-PKS男性版の数量化第Ⅱ類・Ⅲ類による統計的分析～乳児発達研究会発表論文集 第7号 pp. 7—14
- 8) 恒次欽也ほか 1986 妊娠期の母子関係(6)～SCT-PKS男性版の数量化第Ⅱ類による妻の妊娠回数統計的分析～乳児発達研究 第8号 pp. 1—6
- 9) 恒次欽也ほか 1986 妊娠用文章完成法検査 (SCT-PKS) による妊娠期からの母子関係(1)～その概要と統計的分析から～愛知教育大学研究報告 第35輯(教育科学) pp. 235—247
- 10) 恒次欽也ほか 1986 妊娠期の親子関係(1)—年齢を外的基準とした数量化第Ⅱ類によるSCT-PKS統計的分析から—愛知教育大学障害児治療教育センター治療教育学研究 第6輯 pp. 45—56
- 11) 恒次欽也ほか 1986 乳児期の母子関係(2)～SCT-IKSの数量化第Ⅱ類による検討～第33回日本小児保健学会講演集 F31
- 12) 鳩谷 龍 1977 産褥期の精神障害 臨床精神医学 6(4) pp. 493—500
- 13) マーケティング・サイエンス研究会編 1974 マーケティング調査 有斐閣
- 14) Gard, R.P., et al. 1986 A Multivariate Investigation of Postpartum Mood Disturbance *Brit. J. Psychiat.*, 148, pp.567—575.
- 15) Pitt, B. 1973 'Maternity Blue' *Brit. J. Psychiat.*, 122, pp.431—433.
- 16) Watson, J.P., et al. 1984 Psychiatric Disorder in Pregnancy and the First Postnatal Year *Brit. J. Psychiat.*, 144, pp.453—462.